

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2017年7月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第7回仙台国際音楽コンクール 【2019年開催決定!!】

第6回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会

チャン・ユジン ヴァイオリンリサイタル 【東京公演】 演奏評

片桐 卓也 (音楽ライター)



ヴァイオリンで「歌う」ことは、実は難しいと思う。ヴァイオリンはオーケストラでも主要なメロディを奏でることが多く、それゆえ「歌う楽器」とも呼ばれるが、それをどうやって歌わせるか、についてはたくさんのハードルがあるのだ。そのハードルをやすやすと超えてしまうヴァイオリニスト、チャン・ユジンの演奏を東京公演で聴いた時にまず思ったのは、そのことだった。

6月23日浜離宮朝日ホール(東京)で行われたチャン・ユジンの優勝記念演奏会は、まずメンデルスゾーンの「ヴァイオリン・ソナタ へ長調」(へ短調ではない)から始まった。そのソナタの第一音から、ユジンの歌心が伝わって来る。素晴らしい音色によって、次々と繰り出されるメロディ。メンデルスゾーンの音楽の憂鬱は、少し軽く、叙情的ですらあるのだが、ユジンの作り出す音楽のテンションも、またその作品にぴったりのものだった。

実は、私は昨年のコンクールを生で聴いていない。それが今さら残念に思えた。聴けば、生で聴く彼女のシューマンのヴァイオリン協奏曲も素晴らしかったらしい。しかし、今ここで彼女のたくさんのソナタ、小品の演奏を聴くことが出来て、本当に良かったと私は思った。

彼女の選んだプログラムは、そのメンデルスゾーンに始まり、グリーグの「ヴァイオリン・ソナタ 第2番」、ストラヴィンスキーの「ディヴェルティメント」、シベリウスの「6つの小品」から3曲、そしてサン＝サーンスの有名な「序奏とロンド・カプリッチオーソ」である。ロマン派から近代へと至るプログラムと言えるが、なかなか凝った選曲だと思う。いわゆる有名曲はサン＝サーンスぐらい。あまり演奏されないメンデルスゾーンとグリーグのソナタを中心に据えたが、作風が彼女にぴったりで、とても良い選択だった。日本人のヴァイオリニストで、こうした選曲をする人はほとんど居ないだろうとも思う。知られていない曲だが

らこそ、難しいということもあるのだ。

メンデルスゾーンの歌心たっぷりの演奏の後に、力強いグリーグ、そして知的なストラヴィンスキーが続く。自信に溢れていると同時に、ユジンの心の中から自然に沸き上がって来る音楽の勢い、それが弓と弦に伝わって、様々な色彩を持つ音に変化する。単なる「美音」というだけでない、心を持った「美音」。それがユジンの特徴なのではないだろうか？

ピアノの伴奏は小澤佳永(おざわかえ)。聴けば、小澤は第4回ソングエンジェルヴァイオリンコンクール(2013年)の公式伴奏者で、ユジンが優勝した時からの旧知の間柄。それゆえ、ふたりの息はとてもぴったりと合っていた。ふと、ホロデンコを最初に伴奏者として聴いた時のことを思い出した。小澤も帰国子女で、ふたりは英語でコミュニケーションを取っていたようだが、現在アメリカ留学中のユジンの中には、いわゆるインターナショナルな要素と韓国的な要素が同居しているように思えた。韓国的と言うのは、多数のオペラ歌手を輩出している現在の韓国、そのベースとなっている歌への志向のようなもの、と考えて頂きたい。それらがバランスよく配合され、作品を通して、こちらに伝わって来る。彼女の熱い想い、そして、高度なテクニックをひけらかすことなく、音の中にさりりと表現して見せる。その自然な巧みさに、私は時々、クスクスと笑ってしまった、「あまりにも上手過ぎる」という意味で。

これから彼女はようになって行くのだろうか? もちろん、ソロイストとしてのキャリアを作り上げて行くだろうけれども、室内楽奏者としても優秀らしいので、ソロと同時にアンサンブルのほうも捨てずに、追求して欲しいものだ。

彼女の演奏は誰にでもその良さが理解できるものだと思う。音の美しさ、テクニックの確かさ、音楽的な解釈の深み、そうした当然持つべき要素をちゃんと含みながら、彼女らしい個性的な表現が出来る。そういう人はなかなかいないものだ。スケールの大きな演奏家に育って欲しいと願う。

日時：2017年6月23日(金) 19:00開演

会場：浜離宮朝日ホール

共演：小澤佳永(ピアノ)

演奏曲目：メンデルスゾーン：ヴァイオリン・ソナタ へ長調(1838年)

グリーグ：ヴァイオリン・ソナタ 第2番 ト長調 op.13

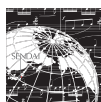
ストラヴィンスキー：ディヴェルティメント

シベリウス：6つの小品 op.79 から

第1曲 思い出 第5曲 牧歌的舞曲 第6曲 子守歌

サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリッチオーソ op.28

(アンコール) ポンセ：エストレリータ



お問い合わせ先 / 公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel: 022-727-1872 Fax: 022-727-1873 E-mail: info@simc.jp URL: http://www.simc.jp/

第6回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会

チャン・ユジン ヴァイオリンリサイタル【東京公演】演奏評

松本 學（音楽評論家）

仙台国際音楽コンクールの優勝者に副賞として贈られる記念リサイタル、その東京公演を聴いた（6月23日）。今回この栄誉ある舞台に登場したのは、昨年2016年の第6回コンクール ヴァイオリン部門で第1位となったチャン・ユジンである。コンクール以降に彼女の演奏を聴いたのは、筆者にとっては、3月26日に行われた大友直人指揮東京交響楽団との協奏曲以来となる。

まず、彼女が組んだりサイタル・プログラムについて触れておこう。選ばれた作曲家は5名、演奏順にメンデルスゾーン、グリーグ、ストラヴィンスキー、シベリウス、サン＝サーンスである。どれも旋律美が印象深く耳に馴染みやすい作品であるが、《序奏とロンド・カプリッチオーソ》（サン＝サーンス）を別とすれば、他の4曲はあまり頻繁に採り上げられない珍しいものばかりだ。しかし、コンクールを振り返り、彼女がセミファイナルで《序奏とロンド・カプリッチオーソ》を、またファイナルでは曲こそ異なるもののメンデルスゾーンとストラヴィンスキーを演奏し、さらに3月の東響とのコンサートではシベリウスを採り上げていたことを鑑みれば、コンクールを中心としたこれまでの流れを意識した曲選びになっていることがよくわかる。その上で、メンデルスゾーンは1838年のソナタ、グリーグではよく知られた第3番ではなく第2番など、もうひとつヒネリを利かせているのがユジン流。大学で楽曲分析や音楽学を専攻する彼女らしい知的な面がこういうところにも端的に表れていると思う。

このようなインテリジェンスは、演奏がいまひとつだと竜頭蛇尾になってしまう恐れが往々にしてある。しかし、ユジンはこれらややマイナーな曲を並べながらも、コンクールの際に証明した高い精度に、発音や造形の自然さなどにさらに磨きかけたパフォーマンスを発揮し、聴衆に退屈させる瞬間を与えなかった。ポウイングの巧みさやそこから生み出される音の美しさも忘れがたい。今回は室内楽ホールでの演奏だったこともあり、彼女の持つ音の美しさや艶やかさ、音色表現の多彩さが一層引き立っていた。

リサイタルの開始から、メンデルスゾーンの爽やかな抒情と自身の華麗なテクニックで魅了したユジンは、この日の白眉とも言えるグリーグでは、両端楽章での民族舞曲調の生き活きとした表現と、それに相対する寂しげな味わい、また緩徐楽章での若さ溢れる感傷や胸の昂まりなどを豊かに描写していた。

ストラヴィンスキーではシャープな切れ味を十全に活かしながら、高音をつかさどるE線は輝かしく、G線は野太くかつつきりとした音で、



頻繁に切り替わる作品の世界を鮮やかに描く。スケルツォの終わりもエレガントにまとめ、パ・ド・ドゥのヴァリアシオンやコーダのスピード感なども申し分ない。

シベリウスでは装飾的なスケールはエレガントに、またゆったりとしたテーマが戻る前には、楽譜に明記こそされていないものの、そこから読み取れるアゴーギク（加速と減速）を加え、音楽にこめられた情感の揺らぎを巧みに表現していた。念のために付記しておく、彼女は作品のフォルムを妙に崩したり、見得を切ってエゴを吐露するようなことは一切しない。この点から室内楽にも相当な適性を感じる。

最後のサン＝サーンスに至っては、もはやデザートのように、くつろぎ安心して楽しむことができた。

リサイタルを通じて言えるのは、ユジンの演奏には過度に求道的だったり、追い詰められたようなところがなく、のびやかで、心から音楽を楽しんでいるようなおおらかさが素直に伝わってくる。これも彼女の魅力のひとつだ。今後、どのような音楽家に成長してゆくのか実に興味深い。

ピアノの小澤佳永の素晴らしいアシストも特筆しておきたい。2014年の宗次コンクールのガラ・コンサートでも共演していた彼女だが、ユジンの感興の動きや息遣いを少しも漏らさぬよう丁寧にフォローしつつ、対話をするように音楽を作っていくそのセンスと才能は見事なものだった（ピアノが重要な役割を担うメンデルスゾーン、グリーグ、ストラヴィンスキーでは特に）。彼女のリサイタルも聴いてみたいと思った当日の聴衆は少なくないだろう。

なお、この日ユジンが使用した楽器は、コンクール時と同じグァダニーニ（トリノ、1771～72年頃製作）である。

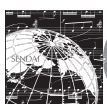
チャン・ユジン出演

九州交響楽団 第361回定期演奏会

日時：2017年9月22日（金）19:00開演
会場：アクロス福岡シンフォニーホール
指揮：ガエタノ・デスピノーサ
ヴァイオリン：チャン・ユジン
管弦楽：九州交響楽団

演奏曲目：
モーツァルト／交響曲第35番 二長調 K. 385「ハフナー」
ストラヴィンスキー／ヴァイオリン協奏曲 二調
フランク／交響曲 二短調
入場料：S席5,200円、A席4,200円、B席3,100円、学生券1,100円

主催：公益財団法人九州交響楽団
お問い合わせ：九響チケットサービス Tel:092-823-0101



■お問い合わせ先／公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel: 022-727-1872 Fax: 022-727-1873 E-mail: info@simc.jp URL: http://www.simc.jp/